

柔道の受け身に対するイメージ調査の検討 —道場指導者を対象に—

A study of techniques to visualize broken falls in judo : Visualization by dojo instructors

田 中 力*, 鈴木 桂 治*, 百 瀬 晃 士*, 成 田 泰 崇*, 山 内 直 人*
斉 藤 仁*, 小 山 泰 文*, 森 脇 保 彦*, 中 島 たけし**

Chikara TANAKA*, Keiji SUZUKI*, Kouji MOMOSE*, Yasutaka NARITA*
Naoto YAMAUCHI*, Hitoshi SAITO*, Yasufumi KOYAMA*
Yasuhiko MORIWAKI* and Takeshi NAKAJIMA**

ABSTRACT

- 1) Based on their average responses to individual questions, 166 dojo instructors were keenly aware that having one's body in a natural position was the most effective way to prevent injuries.
- 2) When visualizing broken falls, dojo instructors did not visualize themselves. Rather, they visualized the breaking of falls by children they were instructing. In order to prevent injuries, they instructed children by constantly envisioning potentially dangerous situations.
- 3) According to Kimura et al.¹⁷⁾, safe instruction in martial arts requires that instructors be : 1) individuals who can appropriately cope with any eventuality so that they can prevent accidents before they happen, 2) individuals with superior expertise and proficiency in judo and superior teaching skills, 3) individuals with a passion for practicing judo and a fondness for teaching young people.

Results demonstrated that the dojo instructors who participated in this study keenly instructed their students with a fondness like that cited by Kimura et al.

Key words: judo, visualization, tradition, safety

I. 諸 言

日本伝講道館柔道は1882(明治15)年、嘉納

治五郎師範によって創始された。日本固有の徒手格闘の武術であった柔術を嘉納師範自身の体験から、精神的・身体的・技術的、いわゆる「心」「技」

* 国士舘大学体育学部 (Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

** 国士舘大学武道德育研究所 (Institute of Budo and Moral Education, Kokushikan University)

「体」により人間にとって最も有効な精神・身体運動であるとの考えに立ち、「精力最善活用」「相譲相助」「自他融和共栄」(1922)の言葉で表された。現在、柔道は、日本固有の伝統文化から世界共有の文化として世界200ヶ国(IJF:国際柔道連盟加盟国数)に広まり1964(昭和39)年第18回東京オリンピックで公開種目として、1972(昭和47)年ミュンヘンオリンピックから2012(平成24)年ロンドンオリンピックまで正式種目として11回開催され普及発展を遂げてきた。

また、一方1911(明治44)年課外授業の正課として剣道・柔道が採用されて以来、終戦により武道禁止・復活・教育改革等が繰り返された。文部科学省が1980(昭和55)年から始まった「ゆとり教育」の後、2008(平成20)年の中学校学習指導要領の改訂により、2012(平成24)年度より中学校武道・ダンスの必修化スタートにむけて各種団体連盟(柔道・剣道・相撲等)において見直し・検討が行われてきた。しかしこの間、柔道の怪我問題が大きく取り上げられ危険性を指摘する声が大きく新聞等で報道され、武道必修化に支障を与えるとともに柔道人口の減少に拍車をかける傾向となってきた。この様な時期に授業で重大事故が起これば永久に学校柔道が禁止されかねない危機的状況であるとして「取っ組み合いをした事もない子供達が人を投げたり投げられたりすれば、事故が起こらない方がおかしい」と指摘、重篤な事故防止の為に授業で行われる乱取り等の実践的練習を排除し、格闘技の要素は薄れ、ダンスや合気道に近いものになるが、他のスポーツと同程度まで安全性が高められるのではないかと提案されていた。

柔道の受け身は、投げられた時に怪我をしない様に身体を守る技術である。柔道の初心者が柔道を習い始める時に、安全の確保の為に最初に習得する必要があるといえる。また、本村ら¹⁶⁾が受け身を練習する効果について「投げられることに不安がなくなり、練習が積極的になり、技術の向上が著しくなる」と述べている。また、1969(昭

和44)年代、大会開会式の挨拶でよく言われたことが「投げられて強くなる」という言葉であった。試合の激しい攻防の中にあつて怪我防止を訴えていたように思う。やはり受け身が上達することは投げ技に対する恐怖心が無くなり技術向上のために効果があると言われる。このように、柔道において受け身は、重要な基本動作であるといえる。

先行研究で扇塚ら¹⁾は、柔道の受け身に対するイメージ調査の検討を、中学生対象に調査を行った結果「受け身に対し、その必要性や身体や健康の保全効果を認識している事が示唆された」と報告している。また、尾形ら⁷⁾の柔道の受け身指導に関する意識については、指導法論的研究の一環で、イメージについての研究は見られなかった。

Ⅱ. 目 的

柔道の怪我問題で危険性ばかりが強調され、柔道という日本の伝統文化そのものが懸念され、柔道人口の減少を加速させている現状に少しでも終止符となる資料を得る事を目的とし、本研究は、指導者の受け身に対するイメージを明らかにする事を主たる目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. イメージの概念について

スポーツ心理学の領域でイメージという用語がしばしば用いられているが、その語義は広義、狭義に解釈され必ずしも明確であるとは言えない。

リチャードソン(Rechardson)⁸⁾は、イメージを残像、直感像、記憶心像、創造イメージ等広範囲に分類している。猪俣ら⁹⁾伊藤ら¹⁰⁾西田ら¹¹⁾の研究もこの説に属する。

西田らはその研究でイメージを過去経験(知覚的、感覚的、感情的経験など)によって、外界の事物の近くと同類的に経験、保持された情報が自己の記憶の手掛かりとしての意識的なレベルで想

起、あるいは再生されたもので絵画的な特性を持つとしている。さらに鶴原ら¹²⁾は、今までの研究からイメージの定義を3つの類型に識別し、スポーツ心理では身体運動について意識内容、運動処理プロセスの研究のほとんどがリチャードソンの説に属するとし、身体運動の意識内容を指す場合、イメージを過去の運動経験によって蓄えられた視覚的、感覚的、体制感覚的その他の感覚記憶から生じている身体運動についての準感覚的な体験であり、ある身体運動が備えている一定の時間的連続を持ったものであると定義している。本研究は、「柔道の受け身に対するイメージ」を捉えようとするものであり、リチャードソンの説に従う。

2. 調査方法及び質問用紙

(1) 調査期間 平成24年9月～平成24年11月10日

(2) 調査方法

扇塚ら¹⁾が作成した調査用紙を採用した。扇塚らはこの質問用紙の作成に当たり、まず予備調査を行った。20答法 (Twenty Statements Test: TST) を採用し「受け身とは」という刺激語に対して、「柔道の受け身に対するイメージを書かせる」方法で、書き掛けの単語 (受け身とは) を調査対象者に与え、その後を続けて文章を完成させる形式のテストである。

この予備調査によって得られた990の記述語からKJ法 (川喜田1967) を用いて類似していると思われる言葉を結び付けて92項目、更に30項目に絞り込み本調査用紙の質問項目を作成した。質問項目は、A) 身体的効果1・8・15・23 (4項目)、B) 体力的効果2・20・24 (3項目)、C) 日常的効果3・9・16・25 (4項目)、D) 受け身の位置づけ4・6・10・12・17・19・20・29 (8項目)、E) 心理的効果5・7・11・13・18・21・27・28・30 (9項目)、F) その他4・22 (2項目) 計30項目から成り立っており、質問用紙ではそれらの項目をランダムに配置し、それぞれの項目について5件法評価尺度によって調査を行った。

(3) 調査対象者

関東一都七県にある153道場に調査用紙 (1道場3枚) を輸送し調査を依頼した。回答結果は、83道場 (回収率54.2%)、221名 (柔道経験者166名・未経験者40名・20歳以下の対象外15名) であった。表1に指導者166名の性別及び年齢別数を示した。(男性152名、女性14名) 平均年齢 48.1 ± 15.8 歳、経験年数 32.5 ± 16.9 年であった。

(4) 分析方法

本研究では、受け身に対するイメージの構造を統計的立場から推定するための方法として因子分析法を用いることにする。因子分析 (factor analysis) は、1900年代の初めから心理学における統計的手法として発達し、その後医学、生理学、社会学、教育学等々、広範囲の分野において応用されている。そしてその根本的な思想は、“ある領域で一軒複雑に見える種々の現象も、極めて少数の潜在的因子 (latent factor) によって説明し得る” という、科学の根底に横たわる簡素 (parsimony) の原則に基づいている。

(奥野ら¹³⁾ 因子分析について Comrey, A.L (1980) は、その著書の中で「多数の変量について相関行列が大きな値の相関係数を持っているという事は、その中にある変量が相当に強く関連していることを示している。変量が多くその間に多数の高い相関があるときは、様々な相互関係があることが予想されるが、これをそのまま同時に考慮して考察することは非常に困難である。この様

表1 指導者の性別・年齢別数 (N=166)

年齢区分	男性	女性	年齢比率
20～29歳	16	7	14%
30～39歳	30	2	19%
40～49歳	35	2	22%
50～59歳	24	1	15%
60～69歳	28	2	18%
70～79歳	18	0	11%
80歳以上	1	0	0.60%
合計	152	14	100%

な場合、因子分析は相関行列にみられる数値を説明するために潜在的な因子を仮定したり、或いは因子という名の構造物を想定し、この様な複雑な相互関係を出来るだけ簡単な形で捉える手段を提供するものである」と述べている。

また、松浦ら¹⁴⁾は「ある種の能力を測定する諸テスト変数は、テスト結果として測定された成果にはいくつかのより単純な能力領域が関与していると考えられる場合が多い。この単純な能力領域を各テスト変数の関連（相関係数、または共分散）を手掛かりとして見つけて行く統計的方法の一つが因子分析法と云われるものである」と述べている。

因子分析にはその方法として実際に二因子解法、二重因子解法、セントロイド解法、主成分解法、主因子解法、多因子解法、多群子解法等の様々な方法がある。

- 5) 非常にそう思う
 - 4) ややそう思う
 - 3) どちらでもない
 - 2) あまりそう思わない
 - 1) ぜんぜん思わない
- として調査内容を得点化し、得られた結果について平均値 (\bar{X})、標準偏差 (SD)、相関行列 (30 × 30) を計算し、最尤法 (Principal factor solution) を施し、固有値 1.0 以上、因子負荷量 0.4 以上の主成分についてノーマル・バリマックス (nomal varimax) 基準による直行回転を適用して多因子解を求めた。

Ⅳ. 結果と考察

1) 項目ごとの得点の平均値と標準偏差 (N=166)

全体 166 から得られたデータを項目ごとに得点化し、30 項目の平均値と標準偏差を算出し、表 2 に示した。その結果、最も高得点を示した項目は (1) 受け身は体を守る ($\bar{X}=4.98$, $SD=0.13$) である。逆に、最も低得点を示した項目は (13) 受け身は恥ずかしい ($\bar{X}=1.33$, $SD=0.85$) である。以下得点順に並べると次の通りである。

得点の高い項目は、

- 1. 受け身は体を守る ($\bar{X}=4.98$, $SD=0.13$)
- 19. 受け身は練習したら上手くなる ($\bar{X}=4.9$, $SD=0.31$)
- 4. 受け身は基本動作である ($\bar{X}=4.89$, $SD=0.34$)

表2 平均値と標準偏差 (N=166)

	平均値	標準偏差	分析 N
1、受け身は体を守る	4.9819	.13362	166
2、受け身は首を強くする	4.4880	.84379	166
3、受け身は転んだ時に使える	4.8554	.43015	166
4、受け身は基本的動作である	4.8976	.34165	166
5、受け身は痛そう	2.4036	1.26481	166
6、受け身は準備運動でする事の一つである	3.6205	1.38190	166
7、受け身は怖い	1.7711	1.23411	166
8、受け身はけがを防ぐもの	4.8193	.62561	166
9、受け身は事故にあった時に使える	4.2108	1.01986	166
10、受け身はなくてはならない動作	4.8133	.60908	166
11、受け身はストレス解消になる	2.7771	1.20794	166
12、受け身はたくさん種類がある	4.0422	1.15655	166
13、受け身は恥ずかしい	1.3313	.85556	166
14、受け身は自分がどうやってとっているのか分らない	1.5602	1.03543	166
15、受け身は衝撃を和らげる	4.8133	.57846	166
16、受け身は身につけておくと便利	4.8916	.34857	166
17、受け身は相手の技をきれいに見せるもの	3.2169	1.36669	166
18、受け身は難しい	2.8253	1.46046	166
19、受け身は練習したら上手くなる	4.9157	.31927	166
20、受け身は目が回る	2.0542	1.18197	166
21、受け身は楽しい	3.0663	.99779	166
22、受け身はコツをつかめばすぐにできる	3.9458	1.06319	166
23、受け身は命を守る	4.7892	.49002	166
24、受け身は自然に体が動くようになる	4.6747	.59510	166
25、受け身は普段の生活のなかでも使える	4.3735	.81219	166
26、受け身は出来ていないと知っていると危険	4.8133	.52345	166
27、受け身は美しいきれい	4.1627	.87597	166
28、受け身はいざという時に使えるか不安	1.9096	1.05499	166
29、受け身は柔道が強くなるための一歩	4.5602	.85599	166
30、受け身はカッコいい	3.7470	1.06564	166

16. 受け身は身につけておくと便利 (\bar{X} =4.89, SD=0.34)
3. 受け身は転んだ時に使える (\bar{X} =4.85, SD=0.43)
- 得点の低い項目は、
13. 受け身は恥ずかしい (\bar{X} =1.33, SD=0.85)
14. 受け身は自分がどうやってとっているかわからない (\bar{X} =1.56, SD=1.03)
5. 受け身は怖い (\bar{X} =1.77, SD=1.26)
28. 受け身はいざという時に使えるか不安 (\bar{X} =1.90, SD=1.05)

得られた項目毎の結果から受け身のイメージを考察すると、得点の高い5項目からは、経験上受け身の重要性及び日常的に有効であるという事を強く認識していると考えられる。特に「(1) 受け身は体を守る・(3) 受け身は転んだ時に使える」など、長年の経験から日常生活において不慮の事故や転倒する場面に遭遇した時などを考えその必

要性及び重要性が強くイメージされていると推測される。

逆に、得点の低い4項目は、柔道経験豊富な指導者が対象であることから、「(13) 受け身は恥ずかしい・(5) 受け身は怖い」などは低い回答が予測できることから、当然の結果を裏付けると考えられる。

2) 柔道の受け身に対するイメージの構造

調査対象者166名(柔道経験者)について、得られたデータすべてを得点化した結果、表3回転後の因子負荷行列に示すように11因子が抽出され、第1因子から第11因子までの全分散に対する累積貢献度は47.072%であった。ここでは因子負荷量0.4以上を解釈のための基準とした。表4は相関行列(30×30)である。また、Cronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.679$ という数値が得られた。

第1因子は、(5) 受け身は痛そう・(7) 受け身

表3 回転後の因子負荷行列 (N=166)

項目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	F 9	F 10	F 11	共通性
5.受け身は痛そう	.765											.650
7.受け身は怖い	.617											.487
20.受け身は目が回る	.590											.430
14.受け身は自分がどうやってとっているかわからない	.444											.507
15.受け身は衝撃を和らげる		.857										.808
8.受け身はけがを防ぐもの		.733										.919
30.受け身はカッコいい			.611									.560
17.受け身は相手の技をきれいにさせるもの			.598									.425
27.受け身は美しいきれい			.556									.522
23.受け身は命を守る				.527								.378
24.受け身は自然に体が動くようになる				.525								.412
3.受け身は転んだ時に使える					.649							.465
25.受け身は普段の生活のなかでも使える					.544							.576
21.受け身は楽しい						.651						.675
11.受け身はストレス解消になる						.606						.561
10.受け身はなくてはならない動作							.935					.999
13.受け身は恥ずかしい								.973				.999
28.受け身はいざという時に使えるか不安									.727			.811
12.受け身はたくさん種類がある										.453		.255
2.受け身は首を強くする											.495	.329
1.受け身は体を守る												.161
4.受け身は基本的動作である												.147
6.受け身は準備運動でする事の一つである												.175
9.受け身は事故にあった時に使える												.405
16.受け身は身につけておくと便利												.311
18.受け身は難しい												.309
19.受け身は練習したら上手くなる												.318
22.受け身はコツをつかめばすぐにできる												.251
26.受け身は出来ていないと知っていないと危険												.085
29.受け身は柔道が強くなるための一歩												.190
貢献量	2.059	1.599	1.550	1.256	1.231	1.224	1.218	1.215	1.080	.985	.704	14.122
貢献度(%)	6.865	5.329	5.166	4.187	4.105	4.079	4.061	4.049	3.601	3.285	2.348	47.072
累積貢献度(%)	6.865	12.193	17.359	21.546	25.651	29.730	33.790	37.839	41.440	44.725	47.072	

表4 相関行列 (N=166)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1、受け身は体を守る	1.000	.186	.060	.092	-.028	.028	-.025	.033	-.016	-.042	-.063	.123
2、受け身は首を強くする	.186	1.000	.079	.069	.064	-.079	.114	.019	.091	.001	.256	.103
3、受け身は転んだ時に使える	.060	.079	1.000	-.019	-.115	.152	-.051	.285	.236	.174	.101	.061
4、受け身は基本的動作である	.092	.069	-.019	1.000	-.282	.097	-.128	-.002	.062	.053	-.026	.118
5、受け身は痛そう	-.028	.064	-.115	-.282	1.000	-.030	.467	-.106	-.104	-.059	.004	-.008
6、受け身は準備運動でする事の一つである	.028	-.079	.152	.097	-.030	1.000	-.129	.236	.049	.131	.054	-.028
7、受け身は怖い	-.025	.114	-.051	-.128	.467	-.129	1.000	-.054	-.038	-.025	.063	.028
8、受け身はけがを防ぐもの	.033	.019	.285	-.002	-.106	.236	-.054	1.000	.136	.531	.043	.103
9、受け身は事故にあった時に使える	-.016	.091	.236	.062	-.104	.049	-.038	.136	1.000	.249	.388	.018
10、受け身はなくてはならない動作	-.042	.001	.174	.053	-.059	.131	-.025	.531	.249	1.000	.207	.071
11、受け身はストレス解消になる	-.063	.256	.101	-.026	.004	.054	.063	.043	.388	.207	1.000	.237
12、受け身はたくさん種類がある	.123	.103	.061	.118	-.008	-.028	.028	.103	.018	.071	.237	1.000
13、受け身は恥ずかしい	-.159	-.015	.016	-.070	.133	-.052	.239	-.148	-.157	.015	-.010	-.051
14、受け身は自分がどうやってとっているのか分らない	-.102	.115	.020	-.197	.284	-.117	.357	.045	.031	-.064	.037	-.091
15、受け身は衝撃を和らげる	.034	.014	.061	-.036	-.195	.206	-.060	.576	.139	.244	.061	.003
16、受け身は身につけておくと便利	.088	-.004	.097	.110	-.189	.002	-.185	.160	.218	.275	.101	.207
17、受け身は相手の技をきれいに見せるもの	-.078	.123	.002	-.030	.033	.070	.019	-.145	.154	-.111	.147	-.056
18、受け身は難しい	-.078	-.029	-.118	.049	.209	-.093	.257	-.220	-.138	-.057	-.129	.076
19、受け身は練習したら上手くなる	-.036	.019	.043	.087	-.200	.051	-.157	.196	-.038	.324	-.033	.075
20、受け身は目が回る	-.109	-.039	-.080	-.166	.435	.057	.391	-.019	.046	-.045	.064	-.059
21、受け身は楽しい	-.127	.149	.164	.002	-.127	-.008	.003	.010	.248	.100	.495	.223
22、受け身はコツをつかめばすぐにできる	-.050	-.024	.009	.035	-.060	.196	-.051	.131	.156	.078	.123	.100
23、受け身は命を守る	-.059	.104	.228	.087	-.077	.069	.220	.013	.162	.212	.207	.155
24、受け身は自然に体が動くようになる	.002	-.068	.194	.103	-.042	.158	-.003	.069	.303	.199	.160	.064
25、受け身は普段の生活のなかでも使える	.007	.095	.416	.073	-.006	.041	.140	.169	.241	.203	.265	.235
26、受け身は出来ていないと知っていると危険	-.049	.015	.014	-.040	.041	.136	.046	.007	-.062	.175	.106	-.027
27、受け身は美しいきれい	.025	.269	.063	-.005	-.010	.031	.029	-.023	.260	.080	.384	.161
28、受け身はいざという時に使えるか不安	-.098	-.005	-.323	-.160	.200	-.082	.324	-.080	-.151	-.064	-.087	-.047
29、受け身は柔道が強くなるための一歩	-.070	.098	-.009	-.031	.008	.083	.082	.100	.065	.016	.151	.043
30、受け身はカッコいい	-.075	.199	-.027	-.038	.090	.074	.080	-.024	.228	.020	.389	.161

は怖い「心理的效果」、(20) 受け身は目が回る「身体的効果」、(14) 受け身は自分がどうやってとっているか判らない「その他」の順で抽出され、心理的にネガティブな面を意識した『心理的マイナス効果因子』と解釈した。

第2因子は、(15) 受け身は衝撃を和らげる・(8) 受け身は怪我を防ぐもの「身体的効果」の順で抽出され、身体を守る事意識した『身体的効果因子』と解釈した。

第3因子は、(30) 受け身はカッコいい・(27) 受け身は美しいきれい「心理的效果」、(17) 受け身は相手の技をきれいに見せるもの「受け身の位置づけ」の順で抽出され、心理的にポジティブな面を意識した『心理的プラス効果因子』と解釈した。

第4因子は、(23) 受け身は命を守る「身体的効果」・(24) 受け身は自然に体が動く様になる「体力的効果」の順で抽出され、身体を守る事意識した『体力及び身体的効果因子』と解釈した。

第5因子は、(3) 受け身は転んだ時に使える・(25) 受け身は普段の生活の中でも使える「日常的效果」の順で抽出され、日常生活において体を守る術として必要性が高い事を示し、『日常的效果因子』と解釈した。

第6因子は、(21) 受け身は楽しい・(11) 受け身はストレス解消になる「心理的效果」の順抽出され、心理面へプラス効果を示しているので『心理的プラス効果因子』と解釈した。

第7因子は、10 (受け身はなくてはならない動作)「受け身の位置づけ」『解釈不能』

第8因子は、21 (受け身は恥ずかしい)「心理的效果」『解釈不能』

第9因子は、28 (受け身はいざという時に使えるか不安)「心理的效果」『解釈不能』

第10因子は、12 (受け身はたくさん種類がある)「受け身の位置づけ」『解釈不能』

第11因子は、17 (受け身は首を強くする)「体力的効果」『解釈不能』

13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
-.159	-.102	.034	.088	-.078	-.078	-.036	-.109	-.127	-.050	-.059	.002	.007	-.049	.025	-.098	-.070	-.075
-.015	.115	.014	-.004	.123	-.029	.019	-.039	.149	-.024	.104	-.068	.095	.015	.269	-.005	.098	.199
.016	.020	.061	.097	.002	-.118	.043	-.080	.164	.009	.228	.194	.416	.014	.063	-.323	-.009	-.027
-.070	-.197	-.036	.110	-.030	.049	.087	-.166	.002	.035	.087	.103	.073	-.040	-.005	-.160	-.031	-.038
.133	.284	-.195	-.189	.033	.209	-.200	.435	-.127	-.060	-.077	-.042	-.006	.041	-.010	.200	.008	.090
-.052	-.117	.206	.002	.070	-.093	.051	.057	-.008	.196	.069	.158	.041	.136	.031	-.082	.083	.074
.239	.357	-.060	-.185	.019	.257	-.157	.391	.003	-.051	-.020	-.003	.140	.046	.029	.324	.082	.080
-.148	.045	.576	.160	-.145	-.220	.196	-.019	.010	.131	.013	.069	.169	.007	-.023	-.080	.100	-.024
-.157	.031	.139	.218	.154	-.138	-.038	.046	.248	.156	.162	.303	.241	-.062	.260	-.151	.065	.228
.015	-.064	.244	.275	-.111	-.057	.324	-.045	.100	.078	.212	.199	.203	.175	.080	-.064	.016	.020
-.010	.037	.061	.101	.147	-.129	-.033	.064	.495	.123	.207	.160	.265	.106	.384	-.087	.151	.389
-.051	-.091	.003	.207	-.056	.076	.075	-.059	.223	.100	.155	.064	.235	-.027	.161	-.047	.043	.161
1.000	.384	-.156	-.021	.177	.275	-.030	.084	.031	.000	-.020	-.108	-.005	.017	-.048	.094	-.073	.059
.384	1.000	.024	-.150	.158	.245	-.241	.292	.075	-.066	-.124	-.037	-.005	.004	.006	.413	.013	.091
-.156	.024	1.000	.109	-.140	-.161	.144	-.056	-.167	.121	.117	.139	-.031	.044	-.059	.032	.004	-.048
-.021	-.150	.109	1.000	-.052	-.097	.299	-.133	.143	.131	.291	.238	.315	-.045	.078	-.175	.063	.073
.177	.158	-.140	-.052	1.000	.052	-.138	.131	.163	.054	-.049	.080	-.057	-.045	.315	.140	.160	.296
.275	.245	-.161	-.097	.052	1.000	-.123	.234	-.050	-.205	-.018	.060	.020	-.035	.008	.273	-.096	.116
-.030	-.241	.144	.299	-.138	-.123	1.000	-.245	.037	.022	.157	.110	.005	.014	-.037	-.131	.152	.044
.084	.292	-.056	-.133	.131	.234	-.245	1.000	.012	-.031	-.064	-.009	-.065	.007	.091	.359	.060	.141
.031	.075	-.167	.143	.163	-.050	.037	.012	1.000	.215	.177	.077	.268	.059	.313	-.132	.233	.392
.000	-.066	.121	.131	.054	-.205	.022	-.031	.215	1.000	.187	.183	.115	.036	.146	-.269	.067	.180
-.020	-.124	.117	.291	-.049	-.018	.157	-.064	.177	.187	1.000	.304	.321	.200	.222	-.295	-.006	.048
-.108	-.037	.139	.238	.080	.060	.110	-.009	.077	.183	.304	1.000	.228	.154	.195	-.163	.110	.185
-.005	-.005	-.031	.315	-.057	.020	.005	-.065	.268	.115	.321	.228	1.000	.008	.306	-.307	.072	.250
.017	.004	.044	-.045	-.045	-.035	.014	.007	.059	.036	.200	.154	.008	1.000	.159	-.020	-.036	.034
-.048	.006	-.059	.078	.315	.008	-.037	.091	.313	.146	.222	.195	.306	.159	1.000	-.161	.080	.486
.094	.413	.032	-.175	.140	.273	-.131	.359	-.132	-.269	-.295	-.163	-.307	-.020	-.161	1.000	.083	-.004
-.073	.013	.004	.063	.160	-.096	.152	.060	.233	.067	-.006	.110	.072	-.036	.080	.083	1.000	.263
.059	.091	-.048	.073	.296	.116	.044	.141	.392	.180	.048	.185	.250	.034	.486	-.004	.263	1.000

各一項目のみ有意な負荷量を示した。通常因子の解釈に当たっては、単一の項目から因子を定義するのは非常に困難であり、かつ正しく解釈されたかどうかについても明確なものではないのでここでの5因子については「解釈不能」とした。

この結果から、受け身に対するイメージの意識構造は、

第1因子「指導者自身のイメージではなく、指導する子供達が怪我をしない、させないと云う様に常に頭の中で安全優先の指導が先行することから起こる記述」《心理的マイナス効果因子》

第2因子「受け身は日常的に体を守る事を意識した記述」《身体的効果因子》

第3因子「受け身が上手く出来るという事は、取と受の理合がはっきりと表現され、綺麗な技即ち安全な受け身となり、結果として楽しくなる等メンタル的要素に関する記述」《心理的プラス効果因子》

第4因子「受け身は日常的に体を守る事を意識した記述」《体力及び身体的効果因子》

第5因子「受け身は日常生活の中で体を守る術として必要性が高いことを意識した記述」《日常的効果因子》

第6因子「受け身は心理面に対してプラス効果を発揮する記述」《心理的プラス効果因子》

第7因子以降（8・9・10・11）は、解釈不能という因子から構成されていた。

以上、因子分析の結果から受け身のイメージを考察すると、

第1因子が「心理的マイナス効果因子」と解釈できることから、道場の指導者は常に、子供達の怪我という事をイメージして安全な指導を心掛けていることが伺える。

第2因子は「身体的効果因子」、第3因子は「心理的プラス効果因子」、第4因子は「体力及び身体的効果因子」、第5因子は「日常的効果因子」とそれぞれ解釈でき、受け身が上手である事は、

柔道の技術向上に対してプラス効果を示し、日常生活面に於いては、怪我予防等に大変に重要である事を認識し、安全な受け身が速く出来るようになって貰いたいという期待が強くイメージされている様に考えられる。

第6因子は「心理的プラス効果因子」と解釈出来、綺麗な受け身は綺麗に技が決まって、晴れ晴れとした爽快感がイメージされていると考えられる。

V. ま と め

以上のことから、

- 1) 全体166名の各項目ごとの平均値からは、怪我予防にとって最適であり効果がある技術という事を自然な形で高く意識されていると伺える。
- 2) 道場指導者の受け身のイメージは、自分自身の受け身に対するイメージではなく、怪我防止の為に指導を受ける子供達の立場に立って危険な状況を常にイメージしながら指導されていると考えられる。
- 3) 木村ら¹⁷⁾ 武道の安全指導のなかで求められる指導者像として1) 事故を未然に防ぎ、万が一の場合でも適切に対処できる人、2) 柔道の専門的な知識・技能及び指導技術に優れている人、3) 柔道に対する情熱を持ち、青少年に対して愛情を持って指導する人とある。

今回御協力頂いた道場指導者の方々はこの結論の通り愛情を以て熱心に指導されているという事が証明されたものと考えます。

ご協力いただいた道場指導者の方々に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 扇塚愛、鈴木祥子、中島たけし、藤田圭一、吉川和利、森脇保彦「柔道の受け身に対するイメージ調査の検討」国士舘大学武徳紀要第27号
- 2) 肥後梨恵子、森脇保彦、中島たけし、飯田顕男「大学女子柔道選手の基礎体力トレーニングの改善」国士舘大学武徳紀要第25号
- 3) 尾形敬史「中学校の柔道に対するイメージについて」茨城大学教育実践研究、8、p109～p120. 1989
- 4) 森藤 才、貝瀬輝夫、菅原正明「柔道の受け身における着床衝撃に関する研究」東京学芸大学紀要、第5部門、芸術・体育42、p87～94. 1990-10
- 5) 真柄 浩、小林一敏、菅原秀二、小俣幸嗣「衝撃力からみた柔道の受け身について」日本体育学会大会号(29)、375. 1978-12-17
- 6) 真柄 浩、小林一敏、菅原秀二、小俣幸嗣「身体部分の位相変化からみた柔道の後ろ受け身」日本体育学会大会号(30)、375. 1979-12-10
- 7) 尾形敬史、沢畑好朗「柔道の受け身指導に関する意識について」武道学研究、24-2、p119～p120. 1991
- 8) Recharadson. A (鬼沢 貞・浦野静雄訳)「心像」紀伊國屋書店、p11-26 (Mentalimagery. Routisdgeand Kagn Paull : London. 1969)
- 9) 猪俣公宏、伊藤政展、勝部篤美「背泳の学習初期におけるモデル提示によるメンタル・トレーニング効果に関するフィールド研究—その方法論的試論—」体育学研究、24-2. p101-108. 1979
- 10) 伊藤政展「水泳技能の観察学習に関するフィールド・リサーチ」体育学研究 24-4. P291-299、1980
- 11) 西田 保、勝部篤美、猪俣公宏、小山 哲、岡沢祥訓、伊藤政展「運動イメージの明瞭性に関する因子分析研究」体育学研究、28-3、p189-205、1981
- 12) 鶴原清志、渡辺 章、中川 昭、荒木政信「運動学習の領域における用語の問題(その2)」スポーツ心理学研究、8-1、p48-50、1972
- 13) 奥野忠一、久米 均、芳賀敏郎、吉沢 正「多変量解析法」日科技連出版社、p232、1983
- 14) 松浦義行「因子分析法」不昧堂、p101-109、1972
- 15) 平沼正治「柔道投げ技における未熟練者の“受け”の姿勢について」武道学研究6-1 p20-21
- 16) 本村清人 編著：「新しい柔道の授業づくり」大修館書店、P150. 2003
- 17) 木村昌彦「柔道専門分科会企画シンポジウム—中学校武道必修化に向けての教育現場の動向と課題について—」武道学研究 44 (3) : 168-174、2012